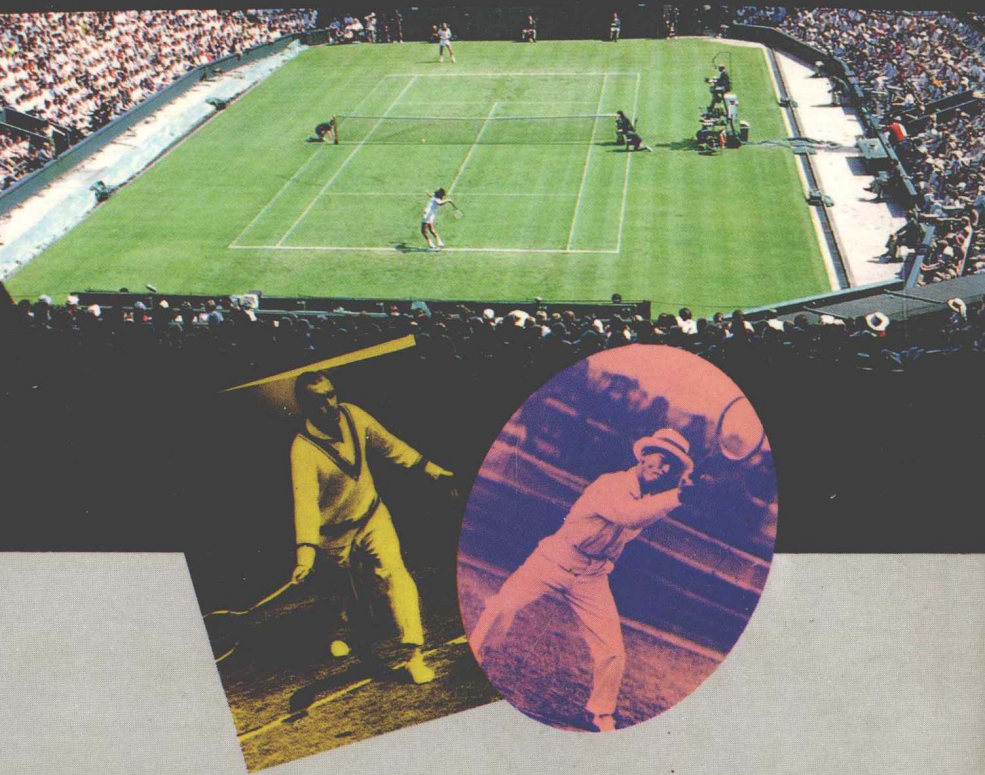


やわらかなボール

上前淳一郎



文藝春秋

やわらかなボール

上前淳一郎

文藝春秋

著者略歴

1934年岐阜県生まれ。東京外国語大学
英米科を卒業後、朝日新聞社入社。通
信部、社会部記者を経て66年退社。以
後評論家として幅広い活動が続けてい
る。77年、『太平洋の生還者』で第8回
大宅壮一ノンフィクション賞を受賞。
主な著書に『洞爺丸はなぜ沈んだか』
『支店長はなぜ死んだか』等がある。



文藝春秋60周年記念
書下ろしノンフィクション
やわらかなボール

1982年6月1日 第1刷

著 者 上前淳一郎
発行者 半藤一利
発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23
電話 東京03(265)1211(代)

定 価 1000円

印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 加藤製本株式会社

©Junichiro Uemae 1982 Printed in Japan
万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

やわらかなボール＊目次

プロローグ 7

第一章 黎明 21

第二章 テニスとの出会い 35

第三章 鮮やかなデビュー 42

第四章 海外へ 58

第五章 アメリカ遠征 76

第六章 黄禍論の中で 97

第七章 初めてのウィンブルドン

第八章 デ杯初参加 162

第九章 フォレストヒルズの闘い 193

第十章 帰郷 211

第十一章 美しき球 240

第十二章 美談の復活 264

第十三章 「われ信ず」 292

エピローグ 297

あとがき 309
参照文献 315

カバー写真

装幀
カラー

坂田政則

田沼武男

垂水健吾

モノクロ
WWP

書下ろしノンフィクション

やわらかなボール

プロローグ

1

一九七三年（昭和四十八年）春のある日、私はニューヨークからサンフランシスコへ行くユナイテッド航空機に乗った。これといって目的のない、気ままな取材の旅の途中だった。

離陸するころになって、読むものをなにも持っていないことに私は気づいた。サンフランシスコへは五時間の単調な飛行である。眠くなるまでの退屈をまぎらせるために、なにかほしかった。

前の座席の背につけられている袋に手を入れて、航空会社が出しているパンフレットでもないか、と探した。パンフレットは入っていなかった。代わりに底のほうから出てきたのは、表紙が少し皺になった英文の雑誌だった。

「ワールド・テニス」と大きく誌名が浮き出ている。一九七三年四月号で、表紙のいちばん上に「世界最大のテニス雑誌、七十五セント」と印刷してあった。発行所はテキサス州のヒュースト

ンである。たぶん、今朝この飛行機でどこからかニューヨークへ着いた乗客が置き忘れたか、読み捨てていったのだろう。

テニスにあまり興味はないが、なにもないよりありがたかった私は、ページを繰って拾い読みをはじめた。最近のトーナメントの結果や、ラケットの使い方の図解などが載っている。

やがて、ある署名記事の中に、清水とチルデン、という文字があるのに気づいて、私はページを繰る手を止めた。テニスがわからない私にも、なじみのある名前だったからだ。

そのとき私が知っているかぎりでは、二人は第一次世界大戦のあとに現われた、すぐれたプレーヤーだった。一九二一年（大正十年）、当時テニスのもっとも重要な国際試合だったデビスカップ争奪戦に日本は初めて参加し、清水善造、熊谷一弥、柏尾誠一郎の三人を出場させた。日本チームは予想に反してよく戦い、インターゾーンを勝ち抜いて、カップ保持国アメリカに挑戦した。その第一日に、清水はチルデンと顔を合わせた。

五セットにわたる死闘が展開された。清水は世界の王者チルデンをあわや破る瀬戸際まで追いつめながら、結局敗退したのだが、もつれた試合の球の応酬のあいだに、長く語り継がれることになるひとつのエピソードが生まれた。コートの芝に足を滑らせて転びかけたチルデンに、清水はゆるい球を返してやった、というのである。

テニスでは、姿勢のバランスを崩している相手の背後に、強烈な球を打ち返していつこうかわない。もしそうしていれば清水は、きわどいせり合いが続いていた試合に貴重なポイントをあげることができただろうし、その結果勝ちを握ることになっていたかも知れない。

しかし、彼はそうしなかった。倒れそうになった相手に激しい球を浴びせることを、いさぎよ

しとしなかったからである。

このエピソードは、戦前、戦後の小、中学校の教科書に採用されて有名になった。戦前は武士道の惻隱^{そくいん}の情の、戦後はスポーツマン精神のあり方を教えるためだった。もっとも、戦後の小学生の中には「そんなの、損じゃないか」と声をあげるものも少なくはなかったが。

「ワールド・テニス」誌の記事は、この挿話にはふれていないようだった。清水とチルデンが戦ったのはニューヨーク郊外のフォレストヒルズだったが、その試合の審判が主人公らしい。

書いているのはバッド・コリンズである。現代アメリカの代表的なスポーツ・ジャーナリストとしての氏の名には、記憶があった。ポストンの「グローブ」紙のコラムニストであると同時に、テレビ解説者としても名高いひとだ。

「ソフトタッチよ、さようなら」と題する氏の記事を、初めから私は読みはじめた。そして、機中での昼寝を忘れた。感動的なストーリーだった。それを、少し整理しながら、紹介してみることにしよう。

2

C・N・フォーテスクは、フォレストヒルズのネット審判（注1）だった。主審もラインズマンもやろうとはせず、九十二歳で引退するまでネット審判だけをつとめた。

いつも夜会服をきちんと身につけ、シルクハットをかぶって、彼はネット支柱の前に坐った。老いてなお人並みはずれた視力と聴力をもっていたが、とりわけすぐれていたのは右手の指先の感覚だった。ネットコードに軽くおかれた彼の指先は、わずかに球がコードをかすめただけでも、

敏感にその振動をとらえた。

「レット！」（注2）

球の接触を感じるたびに彼は、威厳に満ちた大声で宣告した。選手にも観衆にも、球がコードに触れたとは見えないことがしばしばあった。だが、誰もがすぐ納得した。フォーテスクがレットというのだから、いまのはレットだったのだ、と。フォレストヒルズでは彼は、そのくらい神格化された存在だった。

「私はネット支柱と結婚したようなものさ」彼はよくいった。たしかに、ネット審判という仕事を心から愛しているように見えた。「私はここに坐っているのがいちばん好きだし、この仕事では誰にも負けないつもりだよ」

彼の指先の感覚はあまりに繊細だったので、女性の背を抱いてダンスしているうちに、その女性の脈搏ばかりか、血圧まで感じとることができた。

「血圧百二十。健康ですよ。ただ、ちょっとコレステロール値が高いようだが」

ワルツを踊りながら突然そんなことをいって、相手を驚かせた。

指先のデリケートさが広く伝えられていくにつれて、彼には「フィンガーズ・フォーテスク」のあだ名がついた。フィンガーズは、巾着切り、すりのことで、巾着切りも顔負けするほど指先が器用だ、という意味である。フォーテスクが嫌がったために、面と向かってそのあだ名で呼ぶものはいなかったが。

「コードを握るネット審判になるのが、あの子の生まれたときからの運命だったのよ」母親のギゼルダは、そういつて笑ったものだった。「なにしろ、私のおなかから出てきたときもう、へそ

の緒を右手でしっかり握ってたんですから」

父スタイブサントは紙バルブで大金持になったひとで、トイレットペーパー王、と呼ばれていた。両親はテニスが好きだった。まだフォータスクが歩けないころ、コートへ行くたびに二人は、わが子をネットコードにつかまらせておいた。テニスしている間も目が届く、いちばん安全な場所だったから。

フォータスクは、球がネットに触れて、コードがぶるぶる震えるのが手に伝わってくるたびに、声をたてて喜んだ。おかしな子だ、と両親は思った。

小学生のころ、両親に連れられてテニス試合を見に行った彼は、ネット審判を初めて見て強く惹きつけられてしまった。

「ぼくはネット審判になるんだ」

少年はいった。

「じゃ、右手を大切になさい」

ギゼルダはアドバイスした。それから少年は、利き手の右をいつも絹の布で大切に包み、食事や字を書くには左手を使うようになった。週二回整形医に通って、右手の指に異常はないか、細かくチェックすることも忘れなかった。

ハーバードを卒業するまで、彼は父の仕事を継ごうとか、自分でテニスをやろうとか、考えたこともなかった。ただ、ネット審判になりたい、と思いつづけ、ほんとに、報酬など期待できないその仕事につくことになったのだった。

五十年以上にわたって彼は、デビスカップや全米選手権のような大試合のネット審判をつとめ

た。生涯を通して、ミスをしたことは一度もない。とぎすまされた指先の感覚から生まれる判定の絶妙さは、芸術に近いときえいえた。

この偉大な人物が引退したとき人びとは、ロードアイランド州ニューボートにある「テニスの殿堂」に入ることができる初めてのネット審判に彼はなるだろう、と噂した。

引退したフォーテスクは、ニューヨークの東にあたるロングアイランドの東エッグに引きこもり、友人ジェイ・ギャツビーのものだった大邸宅に住んだ。そこでもまだ彼は、指先の鍛練を怠らなかった。

部屋にネットを張り、コードに手をおいたフォーテスクが目をつぶって坐る。夫人がダチョウの羽毛でそっとコードに触れる。どんなに軽くさわっても、フォーテスクはただちに「レット！」と叫ぶのだった。

一九七三年二月十二日、九十八歳で彼は世を去った。寝たきりになってからはベッドの上にネットを渡し、垂らしたコードの感触だけを楽しむようになっていたが、臨終のときも右手にその端を握っていた。

「死んだら、フォレストヒルズの、センターコートネット支柱の下に埋めてもらいたい。そこに坐っているとき、私はいちばん幸せだったのだから」

晩年のフォーテスクは、そう洩らしていた。フォレストヒルズ側はその遺志を尊重し、故人の功績をたたえるために、指定の場所に遺体を埋葬した。

葬儀が終わったあとで、筆者コリンズのもとへ、フォーテスクの執事から一通の封書が届けられた。中には新聞切抜きのコピーと、フォーテスク自身が生前したためた手紙が入っていた。

切抜きは一九二一年九月三日付のニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙に載ったW・O・マックギーハンの署名記事で、こう書かれていた。

「『巾着切り』フォーテスクは、昨日フォレストヒルズで行なわれたデビスカップ戦第一日の第二試合に、ビル・チルデンに肩入れするという、愚かな真似をした。日本の清水は巧妙に球をやつて、まさにチルデンを破り去ろうとしていた。そのときネット審判のフォーテスクが、故意にチルデンに有利な判定をしたのだ。九死に一生を得たチルデンは立ち直った……」

手紙は、この記事の内容を全面的に認めるものだった。フォーテスクはつぎのように告白していた。

コリンズ君。

私は君のことを認めてはいないし、君がしているジャーナリストという仕事も認めたいとは思わない。しかし、君のペンが世間に影響をもっていることだけは認めないわけにはいかないだろう。そこで、君の影響力を利用して、私が半世紀以上苦しんできた罪の意識のことを、人びとに知らせてほしいのだ。

私は誇り高い人間だ。だから、罪をおかしたなどといいたくはない。しかし、やはり真実は記録に残しておかなければならない。そうなのだ。たしかに私は一九二一年九月二日の午後フォレストヒルズで、清水に悪いことをした。それにしてもマックギーハンのやつから、巾着切りなどと、ひどいあだ名をつけられようとは思わなかったが。

その日はデビスカップのチャレンジ・ラウンド第一日だった。初参加の日本が、インターゾ

インを勝ち抜いてカップ保持国アメリカに挑戦してきた。シングルス第一試合では、熊谷一弥がビル・ジョンストンに敗れたが、第二試合にチルデンと当たった清水は、小さいがじつに巧みなプレーヤーだった。

大チルデン相手に、第一、第二セットを7―5、6―4でとり、第三セットも5―4とリードして、ポイント40―30になった。あとひとつで、清水が勝つのだ。

観衆は衝撃をうけた。われらの英雄チルデンがこんな小男に負けるなどということは、誰にも信じられなかった。テニス界では無名の日本だが、チルデンを負かすようなプレーヤーがいるからには、カップを東洋へ持ち去ってしまうかも知れない。そんなことが、ほんとに起きようとしているのだろうか。

私はいつも公平無私なネット審判だった。しかし、このときだけは、どうしても平静な気持ではいられなかった。私は熱心な愛国者で、黄禍論の信奉者でもあったのだ。

清水は最後のサーブをしようとしていた。私は恐怖に襲われた。いまここで、愛するアメリカのために、私はどうすればいいのだろう。

清水は完璧なサーブを放った。エースとなってセンターラインに決まった。敗れたチルデンは顔をゆがめ、清水と握手するためにネットのほうへ歩き出そうとした。そのとき私は叫んだのだ。

「レット！」

スタジアムはしんと静まり返った。静寂を破ったのは清水だった。怒った彼は、私には理解できない言葉で、判定に抗議した。続いて、観客席から私を嘲笑する声があがった。たぶん、